

ニューカレドニアの自然・文化・民族・産業を学ぶ ——2019年度立正大学地理学科「海外調査法およびフィールドワーク」の実践例より——

宇津川喬子*・黛 大樹**・島津 弘*

[キーワード] 1 ニューカレドニア 2 ニッケル鉱山 3 サンゴ礁 4 カナック 5 巡検

I はじめに

立正大学地球環境科学部地理学科で開講している学科専門実践科目『海外調査法およびフィールドワーク』は、「広い視野を身につける」「国際理解」「異文化理解」のきっかけとして「異なった環境の体験」「地誌科目をはじめとする各科目で学んだ事例やその背景を実際に検証すること」を目的としている。2018年度の中国に引き続き（山下・横山, 2019）、2019年度はフランスの海外領土（特別共同体）であるニューカレドニアにおいて「低緯度地方の生活と文化、サンゴ礁地域の環境問題、フランス海外領土の特徴と民族問題」をテーマに実施した。

ニューカレドニアは1966年に出版された森村桂による自伝的旅行記「天国にいちばん近い島」をもとにした同名の映画によって、南国のリゾート地として今も多くの日本人に親しまれている。観光大国というイメージが強いが、ニッケルの産出量が世界第3位（芝原, 2019）という鉱業国でもあり、近年ではコバルトの産出と輸出も進んでいる。また、先住民であるメラネシア系を中心としたフランスからの独立運動の歴史は長く（江戸, 2010）、住民投票の結果が日本でも報道されるなど（例えば、小暮, 2018）、その動向に世界から注目が集まっている。

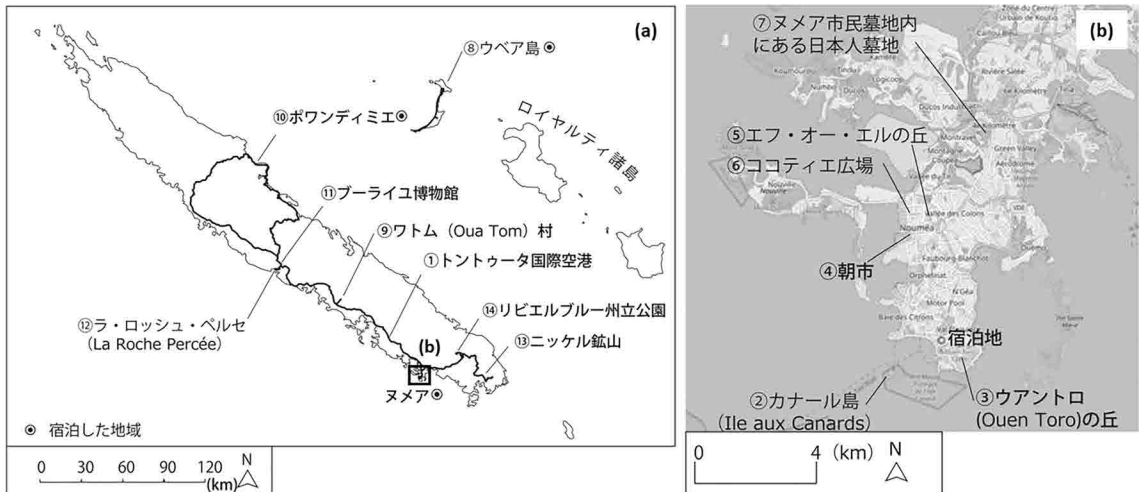
本稿では、II章で実習および巡検の概要を述べ、III章で具体的な行程を、IV章でアンケート結果を踏まえた実習の効果をまとめ、海外を拠点とした野外実習の意義について述べる。

II 実習・巡検の概要

巡検は2019年9月4日～13日（10日間）に実施した。2018年12月に実習の開講を告知し、年明けから学生へ参加希望調査を行った。最終的には立正大学地球環境科学部地理学科の3年生7名、2年生8名の計15名が集まった。2019年度1期（4月～7月）には事前学習として3年生は個人で、2年生はひとりまたはグループでテーマを設定し、文献調査を行った。学生は、地形、地質、植生、気候などの自然分野や環境問題、そして農業、漁業、鉱業、都市、先住民（カナック）や移民、宗教など人々の暮らしや文化に関わる分野など、興味あるテーマを自由に選択し、月に一度程度、その内容を発表した。その際のレジュメは巡検用の資料（実習のしおり）として印刷・配布を行った。事前学習の参考資料は各種観光ガイドブックや、現地で使用されている学校地理教材（Centre de documentation pédagogique de Nouvelle-Calédonie, 2007）、また、ニューカレドニ

* 立正大学

**立正大学地球環境科学部地理学科3年生



第1図 ルートマップ
 (a) ニューカレドニアの全行程 (Google Map を基に作成)
 (b) グランドテール島ヌメア市内 (OpenStreetMap© を使用)

アでの具体的な巡検テーマが提案されている大石 (2019) などを用いた。

南緯20～23° 東経163～168° 付近に位置するニューカレドニアは、グランドテール島 (本島) とロイヤルティ (ロワイヨテ) 諸島からなる (第1図)。エア・カレドニア・インターナショナル (以下、エア・カラン) による日本からの直行便が就航されており、東京・大阪からは8時間40分程度かかる。やや長めのフライトだが、日本との時差が2時間ということもあり、海外が初めての学生でも時差による体調の変化をあまり感じることなく過ごしていた印象がある。また、今回の巡検は9月に行ったことから、現地は冬季にあたり、平均気温は20度程度と過ごしやすい気候であった。

滞在の拠点は首都ヌメアからほど近いリゾート海岸であるアンスパタとした (第1図)。学生ひとりあたりの参加費用は航空費、宿泊費を併せて約25万円であった。なお、全体で行動するときの貸切バスおよび現地通訳兼ガイドの料金は学科負担である。

Ⅲ 行程

〈1日目：2019年9月4日〉

10時に成田国際空港出発ロビーに集合し (写真1)、12時15分にエアカラン (SB-801) でニューカレドニアへ向けて出発した。トントウータ国際空港①へは同日22時50分に到着し、全員の入国手続きが終了したのは0時頃であった。大型バスでアンスパタにあるホテルへ向かい、チェックインは深夜1時頃となった。



写真1 成田国際空港で開催されていたエアカランの企画展示の前で
 (2019年9月、宇津川撮影)

〈2日目：9月5日〉

午前中は希望者のみでホテルからほど近い無人島・カナル島 (Ile aux Canards) ②へ水上タクシーで向かい、サンゴ礁と海岸侵食の様子を観察した。さらに希望者はシュノーケリングで水面下のサンゴ礁の地形やそこに生息する魚を観察した。午後には全員でウアントロ (Ouen Toro) の丘③へ登り、乾燥島嶼熱帯の植生・土壌・地質や第二次世界大戦中にオーストラリア軍が設置した砲台跡、周辺の山や島々を観察した (写真2)。



写真2 ウアントロの丘からモンドール山を望む
(2019年9月、宇津川撮影)

〈3日目：9月6日〉

路線バスで現地の人々に交じってヌメアの中心部へ向かい、路線バスターミナル付近にある朝市④を訪ねた。品物によって5つの棟に分けられ、南太平洋ならではのイモ類や果物、魚、パン類、衣類などの日用品や砂絵、アクセサリーなどの工芸品と品揃えは豊富で、ピークの時間帯は過ぎていたものの賑わいを見せていた。また、ニューカレドニアのマルシェでは一般的に見られるボウルに入ったカフェオレや、タルタルソースと埼玉県川島町で製造されたワサビが添えられた南太平洋のマグロをマルシェの一角で楽しむことができた (写真3)。続けて、ヌメア市内の中心地を散策し、セント・ジョセフ教会やエフ・オー・エルの丘⑤ (現在立ち入り禁止) を歩いて回った。ヌメア中心のココティエ広場⑥周辺で



写真3 朝市の一角にてsashimiとカフェオレボウルを体験
(2019年9月、宇津川撮影)

昼食を調達し、路線バスで郊外のチバウ文化センターに向かうもコンサートイベントのため臨時休館であった。代わりに地元のスーパーで曜日規制のためにロックアウトされた酒売場や陳列する商品の観察、そしてヌメア市民墓地内にある日本人墓地⑦の見学を行った。再びヌメア中心部に路線バスで戻り、ココティエ広場に面したヌメア市立博物館では、スタッフに急遽印刷してもらった日本語訳の解説ガイドを見ながら第二次世界大戦前後のニューカレドニアの様子を学んだ。

〈4日目：9月7日〉

9時40分、ヌメア市内にあるマジェンタ空港から国内線を利用してロイヤルティ諸島の最北に位置するウベア島⑧へ向かった。ウベア島は日本では「天国にいちばん近い島」として有名になった隆起環礁の島であり、環礁の東側にあたる。幅が500m～5km、長さが50kmの三日月型にならぶ2つの島 (大部分を占めるウベア島と小さなムリ島) からなり、環礁の北～西～南の大部分は海面下にある。上空からは環礁とラグーンを一望することができた。地元の運転手兼ガイドによる小さなバスに揺られ、この日は北部を中心に回った。1988年の独立運動 (フランスの特殊部隊によって鎮圧、19名の運動家が殺害された) の記念碑や島で最も大きいサン・ジョセフ教会を見学し、ホテルで昼食後、午後は青の洞穴と

呼ばれる沈水ドリーネ（写真4）やウベア島北部の岩石海岸、ムリ島西部のビーチを観察した。サンゴや貝などから成るきめ細かい真っ白な砂がつくるビーチを体感することができた。また、時間限定のスーパーで買い物をする機会も得られた。



写真4 青の洞穴
優雅に泳ぐ数頭のウミガメの姿も観察できた。
(2019年9月、宇津川撮影)

〈5日目：9月8日〉

ウベア島の2日目は南部を巡った。ムリ島のカトリック教会では日曜ミサが行われており、建物の外からミサの歌声を聞きながら周辺を見学した。ウベア島南部の「レキンの断崖」では隆起サンゴ石灰岩やノッチ（平均海面近くに波の侵食で形成される連続した窪んだ地形）を観察した（写真5）。ウベア島



写真5 レキンの断崖
水辺から断崖にかけてもタブーのため許可なく立入はできない。
(2019年9月、宇津川撮影)

南東部にあるラグーンは聖域のため許可なく立ち入ることは禁忌（タブー）とされていることをガイドから教わった。午後はムリ島周辺のビーチを自由散策し、夕方、再び国内線で本島へ戻った。

〈6日目：9月9日〉

貸切の大型バスでアンスバタから北上し、本島西部にあるワトム（Oua Tom）村⑨のカナック集落を訪ねた。村長に案内されながら村内を見学し、伝統的家屋カーズ（写真6）や集落でのしきたり等を学んだ。カーズは主に集会場（会議場）や村長の家として利用され、いずれの利用でも男性のみ立ち入ることが許されているということであった（ただし村によってその慣習は異なる）。昼食として郷土料理であるブーニャ（タロイモや2種のヤムイモ、鶏肉等にココナッツミルクをかけてバナナの葉で包み、焼石で蒸し焼きした料理）やニューカレドニア産のフルーツを味わい、農作物を見るだけではなく、味覚でも学ぶことができた。午後は、本島を南北に走る山脈を東へ抜け、車窓から東西の植生の違いを観察し、東海岸の町ポワンディミエ⑩に滞在した。西海岸の白い砂とは異なる火山岩由来の黒い砂が特徴的であった。



写真6 ワトム村のカーズ
(2019年9月、宇津川撮影)

〈7日目：9月10日〉

ポワンディミエから海岸に沿って南下し、マングローブや半自生のバナナ等を観察しながら再び西海



写真7 岩場の海岸ラ・ロッシュ・ベルセにて
周囲が侵食されてとり残された岩はル・ボノム (Le Bonhomme. 日本語では「だるまさん」と呼ばれる。
(2019年9月, 宇津川撮影)



写真8 カンラン岩が風化した真っ赤な土壌の
広がるリビエルブルー国立公園
(2019年9月, 宇津川撮影)

岸へ戻った。当初はコーヒー農園やバニラ農園の見学を予定していたが、農園との都合があわず残念ながらできなかった。ニューカレドニアの代表的な食材である鹿肉の料理の昼食をとった後、プーライユ博物館⑪で19世紀～20世紀初頭のフランスからの流刑者やその後のニッケル鉱山発見後に日本を含むアジアからの入植者が当時使用していた生活用品や農耕器具を見学した。また、湾に面した砂岩泥岩互層でできた岩場の海岸ラ・ロッシュ・ベルセ (La Roche Percée) ⑫で侵食地形を観察し(写真7)、アンスバタへと戻った。

〈8日目：9月11日〉

再び貸切の大型バスで本島南東部へ向かい、ゴロ地区にあるVale社のニッケル鉱山⑬を見学した。鉱山内は日本から持参した安全靴と現地で支給されたヘルメット、防護服の着用が義務付けられ、鉱山内は専用バスで移動した。現地スタッフから(英語で)地質や環境対策、生産過程等の説明を聞くことができ、積極的に質問をする学生もいた。Vale社の工場内で現地職員とともに昼食を摂った後、近郊のヤテ地区にあるリビエルブルー州立公園⑭を訪ね、人工の湖であるヤテ湖周辺を散策した(写真8)。19世紀からの森林伐採による土壌侵食が現在も継続し、自

然保護区と指定された今でも、真っ赤に風化したカンラン岩の土壌がむき出しになっているのを目の当たりにした。

〈9日目：9月12日〉

この日は自由行動とし、各自または各グループで、事前調査に基づいた情報収集を18時までに行った。21時にアンスバタのホテルを出発してトントウータ国際空港へ向かい、手続きを行った。

〈10日目：9月13日〉

0時50分にトントウータ国際空港を立ち、7時50分、無事に成田国際空港に到着、程なく解散となった。

IV おわりに：アンケートを踏まえて

10月以降は月に1度程度、事後学習を行い、自由行動を含めて実習中に得られた知見を基にレポートを作成した。これらは実施報告書としてまとめられている。

以下に、2020年3月に行った今回の海外フィールドワークに関するアンケートの回答を抜粋して紹介する。「今回参加してよかったこと」には「実際に行くことで異文化の理解ができた」「数々のカルチャー

ショックを覚える中で、事前調査やそれに基づく予想と、現地の実情とを照らし合わせることの大切さを学んだ」などの回答が得られ、授業の目的に沿った学びが得られたことが実感される。その際、「先輩方と長い間行動を共にしたので自分たちに足りないものを学ぶことができた」など、他学年や興味の異なる学生と行動を共にしたことで得られた良さを実感する回答も複数あった。

一方、「残念だったこと」として、事前調査の不足分さを現地で痛感し、用語等が思うように理解できなかったことや、行程に組まれていたもの実際に赴くことができなかつた場所が複数あったことが挙げられていた。事前学習の大切さを学ぶ機会だったと捉えられる。

特に印象に残った巡検先としてはウベア島が圧倒的に多く(77%)、「日本では見られない光景」や「島独自のルール」が強く印象に残ったようである。次いで朝市やカナック集落、ニッケル鉱山が挙げられた。

最後に、自由回答では再度“海外フィールドワーク”に参加してみたい、と具体的な場所を挙げた要望もみられた。本授業を通して、学生が持つ「行ってみたい」「現地で知りたい」という好奇心や探求心をさらに刺激することができたように捉える。学生には、ぜひ、授業というかたちに縛られず、自分自身(学生同士)でも“世界”を広げる地理的なフィールドワークを展開してほしいと願う。

(受付2020年3月2日)

(受理2020年3月24日)

参考文献

江戸淳子(2010):ニューカレドニアとカナクー多民族社会のエスニシティとアイデンティティ。熊谷圭知・片山一道編『朝倉世界地理講座—台地と人間の物語—15 オセアニア』朝倉書店, 365-376。
大石太郎(2019):南太平洋島嶼地域の観光と社会を学ぶ—ニューカレドニア。島津 弘・伊藤徹哉・立正大学地理学教室編『地理を学ぼう 海外エクスカージョン』朝倉書店, 63-71。

小暮哲夫(2018):仏から独立反対多数 ニューカレドニア住民投票。朝日新聞2018年11月5日朝刊, 6面。
芝原理沙(2019):世界のニッケル需給と今後の動向。金属資源レポート, 49, 1-21。
横山貴史・山下清海(2019):ハルビンと北京をめぐる巡検:2018年度立正大学地理学科「海外調査法およびフィールドワーク」の実践報告。地域研究, 59, 19-25。
Centre de documentation pédagogique de Nouvelle-Calédonie(2007):『Geographie Cycle 3 Nouvelle-Calédonie』。Ouvrage collectif。

An Academic Excursion in New Caledonia

UTSUGAWA Takako*・MAYUSUMI Daiki**・SHIMAZU Hiroshi*

[Keywords] 1 New Caledonia 2 Nickel mine 3 Coral reef 4 Canaque 5 Excursion

* Risho Univ.

** Undergraduate Student, Risho Univ.